

山科醍醐こどものひろば演劇部 ぽっぷ・こーん

「けふこゑて～はじめのいっぽ！～」講評

高杉征司（京都舞台芸術協会）

いつだって対人関係は大きな悩みの種で、その解決を図る時、環境や他人のせいにしては埒が明かない、自分が変わらなければ事態は進展しない、ということになっている。最近では無理せず逃げるのが重宝されているようで、それはそれで合理的かつ健全なのだが、ぽっぷ・こーんの皆さんはこの演目で自分と向き合い、自分を超えていく成長の過程に堂々とアプローチしてくれた。

目を引くのは娯楽性の高さだろう。「山科かるた」を使ったカードバトルやアイドル登場の演出、ラストの歌って踊っての大団円は言うに及ばず、些細な環境音や効果音にも気が配られており、大変楽しめた。そして何より俳優の伸びやかな演技が一番の魅力であった。演じることを心から楽しんでおり、滲み出る笑顔・はっきりした発話・熱を帯びた身体は観客を大いに魅了した。

舞台は現実世界の学校とマコトの無意識が作り出した心象世界の神社を行き来する。（神社には石段があるだけで、これが神社だとは気づかない。セリフでは言っているが観客の意識に刷り込めない。ここは一つアイコンクに鳥居などを構えると狐がいることも腑に落ちたと思う。）この心象世界というのは、現実では他者とうまく関われないマコト（実際に彼女は現実世界では仮面をつけており、関係を遮断していることに示唆的だ）が伸び伸びと交流している世界なのだが、最後にマコトがこの世界を突き破って現実世界の学校へと飛び出していくシーンは実にダイナミックだった。このダイナミズムを利用して今日の自分を超えていくマコトの初めの一步を印象的に表現したのは本当に効果的で、感動的だった。

しかし作劇上の疑問もあって、まずは箱の存在。彼は時間を止め、人の無意識の世界をコントロールし、悩むマコトに解決へのパスを出す、見えざる大いなる力、つまり神だ。ファンタジー要素を強くしたかったようだが、彼を登場させることでマコト（人）が問題を解決し成長するためには神の力を必要とすることになったことは自覚しておいたほうが良い。

そしてマコトとぶつかり合うカオル。彼女が能力が高くても、白札に自由に書き込む創造性がない旨を吐露したのはマコトの心象世界であって、現実のカオルではない。最後にマコトと一緒に歌って踊って問題解決の体をなすのだが、幻のカオル自身が「今度は本当のカオルと仲良くな！」と言っているように、現実世界ではマコトとカオルの問題の共有は起こっていない。タイトルにもあるように、これはマコトの最初の一步であって、解決はその先にしかない。現実世界で勇気を出してカオルにまず話しかけることこそがその「一步」であり、それができれば自ずと未来は好転するだろう。

それにしても作中の先生を見るにつけ、子供同士の問題に大人ができることは何なのだろうと改めて考えさせられた。

山科醍醐こどものひろば演劇部 ぽっぷ・こーん

「けふこゑて～はじめのい～ぽ！～」

この「劇づくり」の楽しい特徴。

それは「山科かるた」から始まっていたのです。

数年前からこの「山科かるた」作りは始まっていたね。それは風の便りに聞いていました。一ああ。面白いこと、やってる！一って。

それはとても良いことだからです。さぞ沢山の「かるた」が出来たことでしょう。そして今回は、そうした「かるた作り」で楽しんでいる子ども集団が、「私たちのこの姿を、劇にしてみよう！」と思ったのです。それが良かったのです。

不思議の世界へ、いらっしゃい。

と、呼びかけて、なだ何も描かれていない「白いカード」の中へ吸い込まれて行って、あなた方は遊んだのです。それは、あなた方の心の中の世界でした。

この文章を書いている私は、今、84歳です。舞台には5, 6歳の方も駆けて居られました。お稲荷さんのお使いの仔狐さんも。一ああ、この世界のことは、今の私には何一つ、分からなくなっている、一と、不安になりました。

が、その中に「常識さん」が居てくれました。客席に居た老人の私は、この「常識さん」を見つけて、安心しました。

つまり、この社会の「常識さん」と一緒なら、この世界へ連れてってもらえるって、安心したのです。そうなんです。。84歳の私も、この時点でやっと、この世界へ入れたのです。あの「山科かるた」とは、つまり子どもたちの「自分探し」であったのです。子どもたちの集団の、子ども自身による、自分探しであったのです。それぞれの子の、今日から始まる「始めの一步」！

ああ、こんな劇もあるんだ！

つまりそれは、老人にとっては、「今日から始まる～始めの一步～」となったのです。さて、私も貰った「白いカード」に、私は何と書きましょうか。

も もう十歳には戻れぬが、嬰鑠（かくしゃく）の旅 向かふ百歳

荒木昭夫（演出家）